

## ◎ 中世の山城



南西方向から見た重信城跡

鎌倉時代から武士が支配する世の中に代わる。全国に守護・地頭が配置され、事実上武士団が統治する弱肉強食の時代に入る。

そして東国武士団は、西国の各地に移転定住して自分の領地を守り、隙あれば隣地を獲得しようとするようになる。

各地に山城を築いて山中に空堀を作り、平らな本丸の地には砦を建て、山麓の樹木を切り払い、見通しを良くして見張り所としている。平生は麓の居館で暮らしていても、いざという時には山に籠って防御を固める。

中世の山城は、熊本城や松江城のような近世の城郭とは異なり、水堀や石垣で敵の侵入を防ぐ仕組みにはなっていない。建物も簡素な造りであった。

県の調査では県内に1500あまり、安芸津町内でも10か所もの山城と思われるものがある。

った。

## ◎ 小早川氏と木谷氏

小早川氏は鎌倉時代の初め、相模国（現・神奈川県）から地頭として安芸国沼田荘へやって来て、本郷町の背後の高山の山上に「高山城」を築いて領地を守り、広げていった（沼田小早川家）。後年、分家の竹原小早川家へ毛利家から養子入りしていた隆景が両小早川家を統合し、沼田川を挟んで西隣の新高山に城を移した。その

後、隆景は海のほとりの三原に進出して、石垣で護る近世の都市型の城郭「三原浮城」を造って移転している。

この「重信城」の周辺には、天神山城、尾首城、市子城そして赤崎城などがあった。木谷氏を中心にして木谷村（木谷浦）を守り、平時は農耕や漁労をして、各地と交流をしていたものと思われる。

江戸時代になり小早川氏は断絶し、木谷氏は毛利氏の後を追って周防の柳井阿月に移ったが離散した。

## ◎ 人々の暮らし

鎌倉時代から南北朝、室町、戦国、安土桃山時代と、武士の台頭と領地争いの中で、大多数の農民達は、地元武士団の兵士として駆り出され、農業もままならず、右往左往しながらの時代であったのであろう。この木谷浦の地では直接の武力衝突・戦闘争乱はなかったようである。中世までの木谷浦は、海岸線が奥まで入り込み、山と谷ばかりで平地が少なく、農業には限界がある。

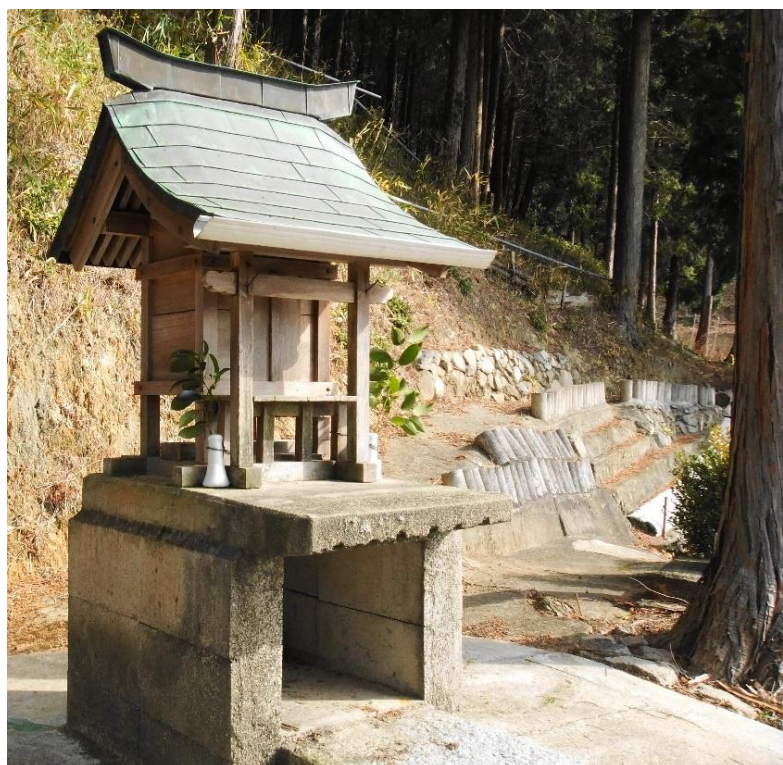
しかし瀬戸内海に面している  
ので、海上交通などに進出して  
いくことが、発展につながるの  
であらう。水軍や海運業に進  
出したのである。

江戸時代には統制は厳しくな  
ったが、戦争がなくなり平和  
が続いた。安芸国は毛利氏か  
ら福島氏へ、そして浅野氏が  
藩主となり、各村に代官や名  
主・庄屋を置いて治めるよう  
になった。庶民は兵役に駆り  
出されずに、農工商業に励む  
ようになった。

平地の少ない木谷村は、赤崎  
は段々畑や塩田、郷も山奥に  
向かっ

て田畑の開墾、西之谷は遠浅の海を農地や塩田にするなどの開発に精を出し、また海運や漁労に携わるのが、生き残っていく道であったと想像される。

## ◎ 鎌倉社



山裾に重信城主の霊を祀る鎌倉社（鎌倉神社）がある。

平成元年（1989）の再建立で、大成家（屋号：重信）が管理をされている。